

NISTEP 定点調査の自由記述検索結果(戦略的創造研究推進事業関連)

2019/07/16

科学技術・学術政策研究所

NISTEP 定点調査自由記述簡易検索用データベースを用いて、NISTEP 定点調査 2016～2018 の自由記述から「CREST」、「ERATO」、「さきがけ」のいずれかを含むものを抽出した後、戦略的創造研究推進事業に関連した部分を掲載。字数が極端に多いものについては、掲載していない。

- JST-ERATO や CREST などでは、助成期間終了後もフォロー期間として多少の助成が継続される場合があります。このような制度は、特に研究の進捗が見られた際には、さらなる発展を図る上で重要と考えます。いったん研究体制、特に経験豊富な人的資源が失われると、せっかく得られた重要な研究成果が四散し失われることになり、結局投資された大型研究資金も無駄になる可能性があり得ます。したがって、同様の制度を大型の科研費にも導入することは非常に有効と考えます。(大学, 第 2G, 工学, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- 昨今、全国的に大学では教育の duty も増加している上に、これに関連した FD (Faculty Development) 活動や学生への対応、さらに大学の管理運営業務も増えていて、教員が研究に使える時間が減っている。そこで研究者を雇いたいところであるが、日本の研究資金は、平均的以上の研究者が科研費を獲得してもポストク等の人材を雇えるほどの金額ではないので、CREST・さきがけ等はあるものの、結局、多くの場合は有力グループが大型予算を獲得し、ポストク等を雇って成果を出し、さらに予算を獲得し…となる。これでは全国的に研究環境の格差は広がるばかりだと感じる。(大学, 第 3G, 理学, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- 一見してアウトプットの分かりやすい基礎研究に対しては、さきがけや CREST などによって十分な資金が配分されていると思うが、基礎研究の多様性を確保する上で重要となる”より基礎的な研究”に対しては、科学研究費助成事業(科研費)しか期待できないのが現状です。より基礎的な研究に対して充実した資金配分が可能となる制度改革を強く望みます。(大学, 第 1G, 工学, 研究員、助教クラス, 男性)
- CREST 等の優れた研究成果を発展的につなげる十分な研究費が整備されていない。A-STEP の基盤研究発展型版のような研究費枠。(大学, 第 2G, 理学, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- JST-CREST については、最近募集分野の幅が狭まってきているように感じられます。まだ基礎研究の段階ですから、どのような可能性があるかわかりませんので、募集分野の、あるいは募集分野内での多様性の確保は重要であると考えます。(大学, 第 2G, 工学, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)

- JST の CREST や、さきがけに問題があると思われる。特にこれらでは、特定の領域を決めているため、科研費の新学術領域のようになっている。○○○○先生が総括をされていた CREST やさきがけのように、もっとダイバーシティーをもった分野を範囲とした CREST やさきがけにしないと、特に若手は領域に合わせた研究しかできない方向にさせられている気がする。(大学, 第 4G, 理学, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- 競争的資金が増えました。さまざまな形のものがあります。そのさまざまな研究費を一つの研究室がとっていくような現象がみられます。競争的資金によって、お金の一極集中が起きています。たとえば、CREST の研究室, さきがけ研究者, 若手 A の研究者, 基盤 A すべて持っている研究室があります。これだけの資金があれば、いくつもの研究室を運営できる予算です。過度な一極集中は考えものです。(大学, 第 4G, 理学, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- 現時点で競争的資金の金額が大きくなりすぎている。競争的資金の目標は、世界で既に遅れたものが目標になる事が多々あり時代遅れの感がある。新学術、NEDO, CREST などそのような事をしばしば体験している。(大学, 第 1G, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- 科研費の審査の質は幅が広く、レベルに達していないような申請が採択されている一方、新しい成果が期待されるような申請が不採択となっており、日本内の仲間内の研究が多く採択されている気がする。採択されてもジャーナル論文につながらず、国際会議論文レベルでとどまっている成果が多く、資金を提供しても、国際的な評価が上がっていないように思える。申請書作成が上手な研究者に資金が集中しており、それは今でも改善はされていないので、資金の集中を排除すべきである。科研費の大型予算では研究進捗評価・事後評価が適切に行われているように思えるが、JST の CREST やさきがけをはじめ他の研究支援では、領域総括の評価にもつながるので、大甘の評価が散見される。問題は、そのような曖昧な評価のために、大型研究費採択者がさらに別の大型研究費をさらっていくところである。要請研究・戦略研究は額が大きいので、評価も厳密にすべきである。領域総括の評価も含めて。(大学, 第 2G, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- JST CREST は大変素晴らしい制度で、今後の成果が大いに期待できる。(大学, 社長・役員、学長等クラス, 男性)
- CREST 等の研究成果を産学連携研究につなげる十分な研究費が整備されていない。A-STEP のシーズ研究的な枠組みがより大きな枠が必要。(大学, 第 2G, 理学, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- 科学技術の政府予算が、全て「結果」や「アウトプット」を重要視しすぎるくらいがあるため、基礎研究として行すべきテーマが、成果重視の無理な研究計画にゆがめられてしまっている場合があるように感じます。特に、科研費や CREST、さきがけ、などの基礎研究を自由に行えることが、日本の科学技術を支えるために重要だと感じます。(民間企業等, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- 長期的な視点で考えると、出来るだけ数多くの分野の、多様な研究を支援することが日本の

研究力の強化に繋がる。現在は1人の研究者が複数の競争的資金を確保することが可能であり、1人に重複した分だけ支援される分野が少なくなり研究の多様性が失われている状況である。より多様な研究を推進するために、科研費だけではなく CREST, NEDO, ERATO なども含めた全ての競争的研究資金での重複を避ける制度が必要である。(大学, 第 2G, 工学, 研究員、助教クラス, 男性)

- 第一段階として、科研費などの基礎研究費は、なるべく多くの研究者に数100万円程度/年の予算を配分することが、日本全体の研究力回復および論文数増加につながると考えている。採択率を 50%以上に引き上げる等して、アクティブな研究者数の底上げが必要に思う。第一段階の成果を基に、さらに高額予算(科研費の上位種目や CREST などの目的指向型)へステップアップしていくシステムが良いのではないかと。(大学, 第 2G, 理学, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- 個人レベルでは挑戦的な研究をしている方はたくさんいると思います。海外勢を含め、横の連携を促すような予算施策がもっとあった方がもっと必要だと思います。一方で、さきがけ・CREST など一部の分野に偏っていると感ずることがあります。新学術領域よりももう少し小中規模で、研究者同士の連携を促すような予算があってほしいと思います。(大学, 第 1G, 工学, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- 産学連携についてのインセンティブがない。いくら産業界と共同研究をおこなって忙しくなっても、外部資金を獲得しても、そのために余分な時間を使うことになる研究者への報酬がない。さきがけ、ERATO 研究者には十分なインセンティブ措置がとられている。(公的研究機関, 部・室・グループ長、教授クラス, 男性)
- 優れた研究と判断する確度が極めて低い。採択された大型研究プロジェクトは大成功のうちにおわったことになることが通例になっている。捏造まがいの研究が、順調にステップアップして ERATO のプロジェクトになっているのを見て心配に思う。(大学, 第 4G, 工学, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- 所属する〇〇〇〇【公的研究機関名】に限ったことですが、研究者のインセンティブ向上という意識が非常に低いと感じています。海外では同世代の研究者が正規の給与のほか、講演料や謝礼あるいは民間企業での役員報酬などを受け取って、年収 1000 万円を超える人がざらにいます。所属する〇〇〇〇【公的研究機関名】ではこのようなことはできません。現在 JST さきがけ研究者を兼任していますが、〇〇〇〇【公的研究機関名】職員は JST からの給与を受け取ることもできません。そのほか客員教授や非常勤講師の報酬も基本的に受けとれません。収入向上はその職業のひとつの魅力です。収入だけではありませんが、優秀な人材確保のためにもこのようなインセンティブ向上について考えるべきだと思います。(公的研究機関, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- スタートアップの整備に対する支援が不足しているのと同様に、若手教員にこそ技術補佐員を割り振るべき研究資金については、バイオ、医療系の材料の専門家が応募できる大型資金が実質 AMED だけになってしまったが、材料の基礎開発テーマでは応募できないのであれば、

さきがけ 枠を別途再設定してもらいたい(大学, 第 3G, 工学, 研究員、助教クラス, 男性)

- 基礎研究に与えられる資金があまりに少なく危惧している。基礎的なことを深く理解するまで研究し、それによって応用できるものを生み出す、という道筋を考えると、基礎研究費が少なくなれば、世の中に役立つものの数も必然的に減っていく。若手研究者で独立したポジションを得た人に対する資金も不足しているように思う。大きな研究室の偉い教授の下で働く助教と同じ種類の資金(科研費若手研究、JST さきがけ、財団等)の他に、特別にスタートアップ資金を準備する必要がある。本来、それは大学が担保すべきものだが、日本の現状を考えると、文科省や学振が管理するほうが上手いかもしれない。(公的研究機関, 主任研究員、准教授クラス, 女性)
- 科研費の審査は一部の研究者に負担が偏っている。この原因は簡単で、一度に 100 件もの申請書を審査する必要があるからに他ならない。より多くの審査員を確保して、一度に最大 10 件以内に抑えるようにすれば負担はかなり軽減できるし、一件当たりの審査にも集中して取り組むことができる。若手 S を再開すべきである。(分野にもよるが筆者の専門である物性物理学を例にとる)ポスドクを終えたばかりの実験研究者が 0 から研究室を立ち上げようとする、少なくとも 5 年で 1 億円のスタートアップ資金が必要である。この額をかき集めるためには、若手 A(最長 4 年で満額 3000 万円だが実際は 7 割掛けしかこないで 2000 万強)に通って、タイミングよく応募できる JST さきがけ(3 年半で 3000 万円程度であったと記憶)がありかつそれに通って、新学術の分担(4 年半で 3000 万程度)に引き入れてもらうという神がかり的な状況でもなお足りない。そういう現状では、若手の(とはいえすでに自立するだけの経験と能力のある)研究者すでに実績があつて資金が潤沢にある教授のもとでその研究室でできる範囲で研究せざるを得ない。これでは急成長している分野の研究者の受け皿がなく、日本の実験研究が国際的競争から致命的に遅れてしまいかねない。その意味では、長期的スパンでは講座制を廃止し、助教は全てテニュアトラック(潤沢なスタートアップ資金を与えることが大前提)として独立した研究室を運営しているアメリカのような制度に変えていくことが望ましいと考える。(大学, 第 1G, 理学, 研究員、助教クラス, 男性)
- 研究者へのインセンティブ付与としてさきがけは良い制度と感じている。あのような制度がさらに多くなると共に、研究者全体がそのような考えで食欲に研究活動を行うようになることを強く望む。(大学, 第 3G, 工学, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- 所属している研究機関では、規定上、大学での非常勤講師の報酬や、JST さきがけの給与など、外部からの収入を得ることができません。国内ほとんどの大学では、教員がこのような外部からの収入を得ることを認めている中で、所属機関では改善される気配がしません。研究者が自分の裁量で収入を増やせるようになれば、それは職業としての魅力になるはずだと思います。(公的研究機関, 主任研究員、准教授クラス, 男性)
- 外部資金獲得に対するインセンティブの不在。多くの外部資金 PJ に従事しても、収入は増えない。さきがけのみ特例。なぜ、さきがけだけ?(公的研究機関, 社長・役員、学長等クラス, 男性)